

「アートワークショップでフィリピンの森を守る」

Cordillera Green Network
アドバイザー 反町 真理子

こんにちは、フィリピンから参りました反町真理子と申します。リソナさんは毎年、小さな環境プロジェクト活動に対して実に多くの心ある助成をさせていただいております。今日はたくさん助成をいただいている NGO や団体を代表して、私どもがフィリピンで取り組んでいる活動を紹介させていただきたいと思えます。タイトルは「アートワークショップでフィリピンの森を守る」です。今日の講演は国内のお話が多かったので、ずいぶん遠い場所の話のように思われるかもしれませんが、実際に遠いところでは

2000メートル級の山々が連なっており、フィリピンの人もあまり行かないようなところでは。しかし一方で、森も水も豊富であり、低地の一大穀倉地域に水を供給しているのはこの地域の 13 の主要河川であると言われて



少し写真で紹介。この辺りで一番有名なのは、イフガオ州というところで、この写真はフンドアンにあるハパオの棚田です。ここは世界遺産のうち、世界文化遺産に指定されているところでもあります。本当に素晴らしい棚田が広がっており、しかも景観が評価されているだけではなく文化遺産というだけあって、阿部先生も関わっていらっしゃる世界農業遺産にも指定されており、持続可能な農業が、いまに至るまできちんと継承されている場所でもあるのです。



何処かといいますと、マニラからずっと北の山岳地帯です。フィリピンと言えば、皆さんまずマニラを思い浮かべると思いますが、マニラは日系企業もたくさんあり、もしかしたらマニラへは皆さんお仕事で行かれたことがあるかもしれません。私が住んでいるのは、そこから北へ車で約 5 時間、バスだと 8 時間もかかってしまう山岳地方、コーディリエラ地方というところでは。その中心にある、ベンゲット州バギオ市に住んでいます。こちらの地図ですと、左の下のほうですね。このコーディリエラ地方には 6 つの州があり、先住民、山岳民族とも呼ばれていますが、住んでいるのはほとんどがそういう人たちです。

この地域はまったく開発から取り残されておまして、それは先住民自身が持っている閉鎖的な文化の影響もあるのですが、やはりものすごく山が多く急峻な地方で入りにくい場所です。



もう一つ、こちらの写真は、同じくイフガオ州のマヨヤオというところにある棚田です。本当に素晴らしい景観です。日本の方

は世界遺産がとても好きで、あちこちに行かれています、ここには 1 人もいらっしゃいません。いわば世界遺産の穴場です、誰もいない世界遺産を見に行きたかったらどうぞフィリピンへ、8 時間かけてお越しください。



進む森林の農地への転換

こういったすばらしい森林、文化、水資源のある場所ですが、こちらの写真のように、いま森林がせつせと農地に転換されています。ここに住む先住民の人には、自分たちが住んでいる場所にある森林や水の価値がよく分からないわけです。彼らとしては森なんかいらな思っていて、森を畑にして日銭を稼ぐための野菜を育てることのほうが大事なことです。この写真は国立公園なのですが、このような状態になっています。



違法な鉱山開発

また、野菜栽培のための畑地への転換と同時に、違法な個人採掘の形で金の採掘が行われています。実は先住民の人たちは、金銭的にとても貧しい地域の人々としてカテゴライズされています。またこの地域は鉱物資源が実に豊富なところでもあって、古くは 100 年以上前から、1980 年代ぐらいまでは金の採掘が大規模な採掘会社によって行われていました。1980 年代に採掘事業者がかなり倒産して採掘は縮小していましたが、近年ここ 20 年ぐらいの間に目の届きにくい小規模で違法な形で個人や小さなグループによって採掘が行われるようになりました。国はいろいろ政策を打ち始めていますが、フィリピンはコネの効く国でもありますので中々取締りは進みません。

このような違法採掘の為に、土砂崩落のような災害も頻繁に起きる場所になってしまっています。

コーディネエラ・グリーン・ネットワーク



- ・フィリピンで NGO 法人登録している非営利団体 (NGO)
- ・2001 年、反町と在住の日本人女性、フィリピン人 3 名の 5 名で設立。
- ・活動目的、ルソン島北部のコーディネエラ山岳地方の環境保全と、そこに暮らす先住民の環境に負荷を与えない形での暮らしの向上。
- ・スタッフは全員先住民。フィリピン人専門家、日本人インターンなども参加。

そこで私が活動しているのが、コーディネエラ・グリーン・ネットワークという団体です。20 年以上前に、フィリピンに移住したことをきっかけに、先住民の人たちと一緒に始めました。

スタッフは全員先住民の人たちです。この小さな活動に関心を持ってきている日本人のインターンの方がいますが、主には、先住民の人たちの立場から、先住民の人たちの目線を失わないようにしながら、環境保全の活動をしています。

CGN のプロジェクト

- ・ 森と水源を守り、災害を減らすための植林
- ・ 森を守りながら、先住民の人の暮らしを向上させるアグロフォレストリー (森林農法)
- ・ アグロフォレストリーで栽培したコーヒーの加工方法指導
- ・ 先住民の人自身が、森を守ることの重要性に気づいてもらうための環境教育
- ・ エネルギー源をできるだけ地域で自給するための適正技術指導
- ・ 有機農業指導



具体的な活動としては植林活動が多いのですが、「植林しましょう」だけでは先住民の人たちのモチベーションが上がらないので、アグロフォレストリー、森林農法という手法で、主にコーヒーを植えたり、そのコーヒーを日本のフェアトレード市場に輸出したりしています。




アートを活用した環境教育プログラム

りそさんにいただいている助成金は、今日プレゼンさせて

いただく「アートを使った環境教育」という取り組みに使わせていただいています。

CGNの環境教育の目的

- ・自然をいつくしみ、木を育てる人を育てる。
- ・先住民族にとっては、あまりにも身近な自然の価値を再発見する。
- ・ないものを数えない。持っている豊かさを学ぶ。



- ・環境教育セミナー&ワークショップ
- ・教員向け環境教育ファシリテーター養成講座
- ・演劇やアートを活用した環境教育プログラム
- ・環境教育教材の制作と学校への配布
- ・環境イベントの開催
- ・幼児向け体験型野外教室

いま申し上げたように、先住民の方は山岳地方に住んでいるのですが、「それほどの山奥に住む人たちに環境教育をする必要があるのか」と思われる方もいるかと思います。けれども、彼らは自分たちが持っている豊かさに気づいていないのです。しかし、彼ら自身の歴史を見てみれば、伝統的にあるいは先住民族古来の知識として、自然といかに一緒に生きてくかという叡智を伝えているわけです。それがどんどん失われてしまうのは大変もったいないと思いました。最初は私たちの環境教育も、西洋的なテキストブックを使って西洋的な手法で教えようとしたのですが、ふと気づいたら「彼らから教わることのほうが多い」ということに気づきました。そこで、私たちの環境教育では、彼ら自身に気づいてもらうために、アートや演劇を活用したワークショップをしています。

演劇を活用した環境教育ワークショップ




先住民の伝統文化を取り入れながら、民話やコミュニティの環境問題に題材をとった演劇をワークショップで制作

ワークショップは青少年向けのものが多いのですが、例えば、ある環境問題に対して、まずは彼ら自身にその環境問題に関わるいろいろな立場の人をピックアップしてもらい、話を聞きに行きます。例えば小規模鉱山開発であったら、せつせと穴に入って掘っている若い子たちに話を聞いたり、そこから利益を得て子どもを大学に行かせることのできた先住民に話を聞いたり、あるいは、反対運動をしている活動家に話を聞いたり、彼ら自身が取材をして、いろいろな立場の人の声を聞いてもら

います。そして、その取材内容から一人称のモノローグの原稿を起こしてもらい、それらを構成してから演劇作品に仕立てるということをしています。つまり、机上の空論として学ぶのではなく、彼ら自身の身近にある問題について、演ずることで自分たち一人ずつが役割を担っているということを実感してもらおう、という手法です。

アートを使った子供たちへの環境教育ワークショップ




土、粘土、植物の繊維、ゴミ、端切れなど、身近な材料を使ったアート・ワークショップで自然の豊かさを伝える

それから、ビジュアルアートを使った環境教育も実施しています。彼らは「私たちは絵の具がないから絵が描けない、紙がないから絵が描けない、自分たちにはなんにもない」と思っています。でも、実は日本画で使う絵具を見ても分かるのですが、自然の中には全ての色があるのです。泥だったり草木だったり、そういうものを集めてきてもらうところから始めて、それらで絵を描いてみよう、というワークショップを行っています。こちらにある右の写真は、大阪の版画家の方に来ていただいた、民話に題材をとって、版木を掘り、泥絵の具を使って刷り、それで小さな本を作るというプロジェクトです。

ソイル・ペインティングでティピ作りワークショップ




それから、大きな作品も作っていて、こちらの写真は、ネイティブアメリカンのティピですね、こんな大きなものも、先住民の子供たちと絵を描いたりして作りました。これもソイルペインティングといわれる、泥絵の具の作品ですね。



先生たちものってきて、「教室の壁に描いてもいいよ」と言われたこともあります。この写真のように、教室中がこんなふうになりました。



ファシリテーターとして、日本の方に協力を得ることも多々あります。フィリピンにも素敵なアーティストの方はたくさんいるのですが、自分の活動を環境教育というコンセプトと結びつけることがなかなかできないのです。こちらの日本人の紙すきアーティストの方は、なんと、フィリピンの山の中に 30 年以上住んでいる方で、つまり、フィリピンの山岳部で手に入る自然の素材にとっても詳しいのですね。かなりの知識を持っていらっしゃる方です。それで、この方をお願いしてワークショップをしていただいたこともあります。こちらの左の写真は、パイナップルから繊維を取っているところです。みんなの身近にあるパイナップルから、割れた皿などを使ってスッとこすって繊維を取ってくれました。最終的に、自分たちの手で繊維をたたいてほぐし紙にしていくところまで、ワークショップで実施しました。その紙を利用して、例えば卒業証書を作って、先住民の方たちに、「なんだ、自分の暮らしの中で絵の具もできるし紙もできるじゃないか」ということや、「実は自分たちの村って、なんにもないことはなく、なんでもあるじゃないの」ということに気づいてもらえるよう工夫をしています。こちらからは何も言わず、彼ら自身に気づいてもらうことを心掛けています。



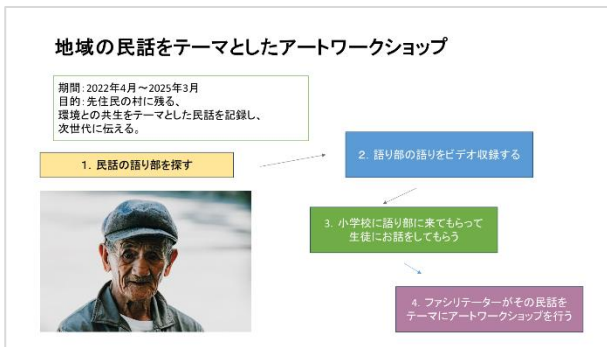
こちらの写真は、端切れ布を使ったタペストリー作りの様子を写したものです。環境教育では、コミュニティマップ作りという、「自分の住んでいるコミュニティには何があるかな」ということを調べる活動をよくしますが、その地図を布を使って作るというワークショップです。先住民の人はちゃんとした針と糸など持っていない人が多いのですが、市場で捨てられていたようなものをもらってきたり、テーラーというか、ミシンでいろいろなものを縫ってくれるところから端切れをもらってきたりして作っています。こちらのスライドに写っている作品は、フィリピンのアーティストの人がファシリテートしてくれたものです。



こちらの写真に写っているのは、先ほど紹介したソイルペイントを使った、版画ワークショップの様子です。右下の写真の子どもは何をしているかというと、村では筆もないし絵の具もないし、紙が一番安い 10 円ぐらいのもの、学校で使っている紙しかないのですが、サツマイモがあるので、サツマイモを持ってきてもらって、それでロールスタンプを作って、それを版画のようにして刷って作品を作っているところです。みんな日ごろからナイフを使っているので、ナイフ使いはとてもうまいです。出来上がった作品は、教室の壁にみんなで貼りました。



こちらは楽器作りの様子です。真ん中の下の写真の人は、大阪の少し変わったミュージシャンの山本公成さんという方です。土地にある土や竹を使って、豊かな音を生み出すような楽器作りのワークショップをしてくれました。絵だけではなく音さえも作れるのです。「自分たちは、こんなにいろいろな音が出るんだ」ということを気づかせてくれたことになります。



そういった活動を経て、いま、りそなアジア・オセアニア財団さんから助成をいただいているのは、地域の民話をテーマとしたアートワークショップと教育教材の制作です。2022年の4月から3年度の予定で助成をいただいています。昨年度で1年目が終わりました。

山に住む先住民の村には、環境と人間の共生を扱った物語がたくさん残っているのですが、自分たちが伝えてきた物語を忘れかけているということが、すごくもったいないと私は思いました。パンデミックになって、世界中どこもそうだったと思いますけれども、特にフィリピンでは2年半近く学校が休校になってしまっていました。子供たちみんなから借りた小さなスマホでゲームをすることに夢中になっていました。移動規制が厳しく山の村から外に移動もできなかったのも、「じゃあ、コミュニティの中にいる長老たちの話に耳を傾けてみようよ」ということでこのプロジェクトを立ち上げました。



まず私たちは民話の語り部のところに調査に行きました。そして、その語りをビデオで収録しました。このプロジェクトは小学校8カ所で実施しましたが、小学校に語り部を呼んでお話をしてもらいました。そして、日本の神戸から画家の方に来ていただいて、民話の世界をビジュアルとして表現するというアートワークショップをしました。この写真は、その語り部の人たちに小学校に来てもらったときの写真ですが、もう皆さん、すごかったです。私たちは、語り部の老人の皆さんが来てくれるかどうか不安だったのですが、皆さんやる気満々で、おしゃれをしていらっしゃいました。子どもたちに話をできる機会というのが、これまでなかったのです。私たちよ者にしてみれば、すごく面白いお話だし、それだけ価値があるものだと思うのです。こういった物語を伝えている人は、すでに日本ではコミュニティの中にはおりません。今回のプロジェクトで語り部をくださった皆さん自身は、やはりその価値に気づいていないのですが、「お話に来てくださいますか」とお呼びしてみたら、右の写真の女性なんて、もう衣装も準備して、小道具もそろえて、台本書いてきてくださって、とても楽しい場となりました。





次に、こちらの高濱浩子さんという神戸のアーティストの方が、その民話をテーマとして、みんなでさまざまな手法で絵を描くというワークショップをしてくださいました。そして最終的に、こんなに大きな絵ができあがりました。この時とても大事にしていたことは、一人一人が自分の世界で描くのではなく、みんな違う感性があって、みんな違う感覚があって、それを最後に一つの絵にしてまとめよう、ということです。そういうかたちのアウトプットとして、それぞれの学校で、最終的に大きな絵を何枚か作りました。



そしてこの活動には、演劇的な要素も含めています。この写真に写っているのは、大きな木とサルのお話を基にした活動の様子です。このアート作品、インスタレーションを作った子どもたちは、みんな、サルになっているつもりなのですね。木にぶら下がっているのは、みんなが物語の中のサルになって、自分たちが描いた絵で楽しんでいます。



こちらの写真は、豚が出てくるお話のときででしょうか。豚はこちらの先住民文化ではすごく重要な意味を持っているのですが、その豚が水源のありかを探してくれて、人々はその水源のある所に移り住んで村ができたというお話を描いた絵です。

高濱浩子さんは、関西を中心に各地で報告トークとアートワークショップを開催



神戸 ども木の森での展示

こういった活動に参加して下さって高濱さんは、3年間のパンデミックで移動制限がありずっと海外に行けなくて、その後ここに来て、すごくいい経験をさせてもらったと話してくれました。そして、「教えてあげたのではなくて、私のほうが学んだことが多かった」と、大きな絵を2枚持って帰られて、関西を中心に10カ所以上で展示し、ご自身がフィリピンで体験されたことのお話もされました。こちらの写真は、神戸ども木の森というところでの展示です。安藤忠雄さん建築のすばらしい建物の中で、子供たちの絵が展示されています。

現在、民話と
アートワークショップで描かれた絵と、
ワークショップの写真による
学校教材としての本を制作中

最終的にこのプロジェクトとしては、民話と子どもたちが描いた絵で絵本を制作して、それを学校教材として、お話を提供してくれた人、あるいはそのお話が伝わっているコミュニティの人に残していきたいと思っています。ただ、絵本の制作が、いろいろあって停滞しています。それは一つには、私がまったく語り部の人たちが話す言葉が分からないということがあります。

民話はカンカナイという民族語で話されるのですが、それをきちんと英語にできる人もほとんどおらず、文字がない民族なので、カンカナイ語を書き起こすこともできず、そんな中でそれ

それぞれの長老たちが「そうじゃない」「ああじゃない」と言われましても、私には「これじゃないですか?」と判断する力がありません。でも、環境と人間の関係をテーマとした物語を子どもたちに残す、そのコミュニティに残す、つまり継承が一つの目的ですので、苦戦してはいますが、どうかかたちであってもなんらかのかたちで残せるよう、頑張っていきたいと思っています。



さて、なぜこういうプロジェクトを思いついたかという話をさせていただきます。今回のプロジェクトはコロナ流行後の話ですが、フィリピンはコロナ禍のときに、ロックダウンというものがものすごく厳しくて、日本の比ではありませんでした。毎日、ほとんどまったく外出ができないという状態です。市の広報課のフェイスブックから毎日、「ここはロックダウン重点地区です」、「ここから感染者が何人出ました」とお知らせしていました。公式の情報源が市のフェイスブック・ページです。だから、市の人口以上の人が、フェイスブックの市の広報のページに「いいね」をしていました。



フィリピンでは、ある日突然、一切の公共交通手段、バスもタクシーも、ジプニーという一般庶民の一番の交通手段もなくなりました。お買い物さえもまったくできず、代わりに各家に1枚ずつ、外出のための許可証、パスというものが配布されましたが、それで毎日出かけられるかというと、まったくそんなことはなく、一家の1人だけが週に2回だけ外に出ていい、といったパスです。それ以外では外出がまったくできないような状態で

した。政府からのサポートもまったくないわけですが、それでもフィリピンみんなが生き抜いたのは、フィリピン特有の経済的な事情があったからです。つまり海外に出稼ぎに行っている人が多く、しかも、その人たちの多くが、介護や看護など、あるいは運転手などのエッセンシャルワーカーだったのです。彼らからの仕送りが絶えなかったということがあったと思います。だから、街の目抜き通りでは銀行はじめほとんどの店舗が閉まっているのに、ウェスタンユニオンなど、質屋のような、民間の送金システムの店舗だけは、何百メートルも行列ができていたという状況でした。



私が住んでいるバギオ市は一番の収入源が観光という街なものですから、お店は全部、本当に見事につぶれています。マニラ資本のフランチャイズの店舗ではない地元資本の店で生き残っていたのは、お金のある人が所有していたいくつかのレストラン、それだけだったと思います。小さいところはほとんど全て倒産してしまいました。それは世界中どこでもそうだったと思いますが、一方で、オンラインでのビジネス、宅配ビジネスなど、新しいビジネスがあつという間にすごい勢いで発展していきました。



私が住んでいるところは、山岳地方の商業・文化・教育の中心な町なのですが、先住民の若者たちは、急に大学の授業がなくなったので、なんとかして自分のふるさとの山の村に帰りました。それから、お土産屋さんやレストランで店員として

働いていた人たちも、観光客が一人もいなくなってしまったので、もう帰らざるを得なかったわけです。地方の都市や街には、地方自治体の手配した小さなバスやジブニーなどが迎えに来て、先住民の人たちはそれに乗ってしかたなく村に帰っていききました。

日本でもそうですが、いままで地方は、過疎化というか、若い人たちが働き手が都市に出ていってしまう問題を抱えています。けれども、逆に若い人たちがどんどん帰ってきてしまったことで何が起こったかという、畑地の拡大がどんどん始まりました。パンデミック下とはいえ、食べるものだけはどうしても必要でしたし、それに加えて健康志向がすごく盛上がったからです。家にいるのでみんな運動不足でしたし、特に、マニラなどでは、野菜を食べなければいけないという風潮が高まり、野菜の需要が増えました。プロジェクトを行った地域は野菜の一大産地なのですが、森林の農地への転換はどんどん進みました。政府は無許可の森林伐採を禁止しているのですが、背に腹は代えられないということで、目をつむっていたようなところがあったのではないかと考えています。

それから右の写真です。日本でもそうだったかもしれませんが、都市の人たち、つまりマニラの人たちが、「癒しの場」と言っ、て、自宅のマンションの部屋などで観葉植物を育てることがブームとなりました。いままで山の先住民の人たちは「山に生えている普通の植物がお金になる」とはかけらも思っていなかったのですが、希少な植物をとってきて、それをフェイスブックで販売するというビジネスも非常にはやりました。また収入源を断たれ、日々の暮らしに必要なお金がないので、しかたなく違法な鉱山採掘に従事する人も出てきました。コロナ禍では、検問があちこちにあつてどこにも行けなかったのですが、そんな中でも、歩いて鉱山のある地域に行つて、手掘りで金などの採掘をする人が増えました。こういった採掘は多くの場合違法で、許可のないまま行われています。

マウンテン州サダンガ町の町長

「先住民コミュニティはこういった非常時に備えて常に食料の備蓄がある。そして富める者が貧しきものに分け与える伝統は今も生きている。

社会福祉省からの食料などの配給は、都市部の貧困層に回してほしい」

→SNSでの投稿は、コーディネラ先住民はもちろん、外部からも絶賛。

・SNSを使ったオンラインビジネスが急激に広まった都市部。「サポートローカル」を謳い、地方で生産された特産品や先住民の手織物などを扱うオンラインショップが次々登場。

→コロナ禍が、先住民たちが自らの文化・暮らしを見直すきっかけとなった。




サダンガの町長とコミュニティ写真 (Facebookより)

つまり、若い人たちが、蓄えのない人たちは都市では生きられなかったけれども、先住民の人たちは山に帰つたら生き延びることができたわけです。山岳地方の貧しい村には、社会福祉省からほんの少しの配給がありました。町に住む私の家にも配給がありましたが、コメが2キロぐらい、干し魚が1袋、そしてサーデインの缶詰がいくつかという感じでした。そんな中、マウンテン州のサダンガという町の先住民の町長は、「そんなものは僕たちはいらぬですよ」と言ったのですね。「私たちは、伝統的には、何か起こったときのために蔵の中に1年分ぐらいのコメは蓄えている」ということで、さらに、「だからそういった配給は、都市部の本当に困っている人たちのためにあげてくれ」と町長がフェイスブックで投稿したのです。その投稿は、先住民の人たちの絶大なる支持を得ました。

いままで、先住民の人たちは、差別まではいかないかもしれませんが、どちらかというと、貧しくて最底辺の仕事をしている人たちが、というふうに見られていたところもあると思うのです。でもこの緊急時、コロナ禍においては、彼らのほうが、胸を張つて「僕たちには生きていく力がある」、「僕たちには助けあうコミュニティがある」と言えたのだと思います。だから、コロナ禍によつて、先住民コミュニティの中では急速に自分たち自身の民族の暮らしや文化に対する関心が高まりました。自分自身の暮らしを見直すきっかけにもなつたと思います。

2年半に及ぶ学校封鎖

- 山岳部ではインターネットがなく、オンライン授業ができない。
- 家庭での自習となったが、親が教育を受けておらず教えられる。
- 家庭で教えるための教材がまったくない。
- 外部との交流が完全に断たれ、将来への夢を抱けない。




→教育レベルの低下。
→10代の妊娠増加。
→インターネットのある都市部と地方での教育格差の拡大。

一方で、やはりよくなつたところもありました。日本でもそうでしたが、パンデミックの頃は、対面での活動ができなかつたので、何もかもオンラインで代用しようとしていましたね。なんとフィリピンでは、2年半にわたつて、幼稚園から大学に至るまでまったく対面授業がありませんでした。そして、別のかたちで「自習しろ」ということだったので、「子どもは大事だから家を出るな、親が学校に行つて先生たちから宿題みたいなのをもらつてきて、家で勉強させろ」ということになつたのです。けれども、親世代の先住民の多くが高等教育を受けておらず、

自宅で子供に勉強を教えるのが難しかったのです。また、山岳部ではインターネットはまだいきわたっておらず、オンラインで代用できることはほとんどなかったわけです。結果、2年半の間、山岳地方では教育ということが、子どもたちにはほとんどなされませんでした。

今回、りそさんに助成いただいている事業を始めたきっかけに戻りますが、要は教材がない、インターネットがない、先生がいない。ない、ない、ない、という中で、けれども彼ら自身の文化の中には物語も豊富にあるじゃないかということで、自然とともに生きる、協調して生きる、その術(すべ)を村の長老たちに聞きましょうというプロジェクトとなったわけです。

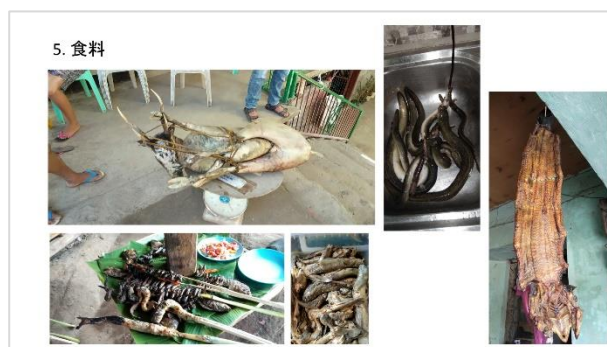
ワークショップの内容をお伝えするために、少しだけ例として紹介します。こちらの写真に写っているのは、りそさんの助成事業ではないのですが、やはりコロナ禍で私たちがオンラインを使って実施した演劇ワークショップのプロセスになります。このプロジェクトでは、4つのコミュニティでそれぞれ民話にテーマをとって子どもたちに演劇制作をしてもらい、人の移動ができなかったので、最終的にビデオ班だけを送って撮影しました。私はちょっとよそ者なので入りにくかったため、私も行っていません。最終的にはビデオを参加者同士で見せ合っただけで交流しよう、というプロジェクトです。演劇作品には、コロナ禍でコミュニティで起こったことを加えてほしいとお願いしました。



それで、まずは自分の村を見なおそうということで、コミュニティで演劇ワークショップに携わってくれる先生に、「大切なもの」を挙げてもらいました。そのうちの一人の先生は、自分の村で大切なものとして、一つ目に田んぼを挙げました。こんな美しい棚田がある村ですから、田んぼは欠かせないものです。二つ目が、山です。これももう、一番身近にあるもので、そして彼らが一番大事にしているものです。



三つ目が川です。これがないと水浴びもできないし、ここから得られる魚という食料もないですからね。そして、四つ目が道です。これは大変意外だったのですが、深い山の中に住んでいる人たちにとって、やはり4番目に来るほど大事なものは、街とつながる道だというわけですね。これはたぶん、街に住んでいる人にとっては、いまやインターネットではないかと思いますが、みんな外とつながりたいという気持ちがあるのです。どれだけ自給自足度が高かったとしても、やはり外とつながりたいというわけです。この写真の奥のほうにあるのが道ですけども、街からつながっているわけではなく、いまだに、右のような渡し船で二つの川を渡らないといけないところですよ。



五つ目が、食料です。そして、「食料」ということで送ってきた写真がこれです。左上の写真が分かりますか？これは、山に行き獲ってきたシカです。驚きました。シカがはかりに載っている写真ですが、彼らにとって食料といって一番先に見せてくれる写真がシカで、次がこれ、ウナギですね。天然ウナギです。それを、このようにかば焼きにしたり、このように揚げ物にしたりして、「これが自分たちにとっての食料だ」と言ってくれました。このように、「一番大切なものだ」と挙げてくれたのですが、すぐく考えるとところがあります。彼らにとって生きていく上で必要最低限のものは、彼ら自身の周りから全部手に入るものなのだとすることに、心を打たれました。

コミュニティでの演劇ワークショップのプロセスで
「自分の村で大切な3つのもの」を子供たちにあげてもらった。



1. 光：太陽光、月光、懐中電灯、電球など。
光がなければ、私たちは見ることができない。特に目の不自由な人は、光がなければ、それが昼か夜かを判断することが困難になる。
2. 木や花などの植物
私たちに酸素を供給し、酸素がなければ私たちは死んでしまいます。
3. 私たち人間
もし人間が一人だったら、この世界で生きている意味がありません。なぜなら、もし私たちが一人だったら、一人で歩いていることになり、誰にも伝えられず、何をすべきか、何を言うべきかわからなくなるからです。

別のコミュニティでの演劇ワークショップでは、今度は子供たちに「三つの大切なものを挙げてください」と質問しました。一番として何が挙がったでしょうか。この写真の子供は小学校 6 年生の女の子です。この子が、「1 番は光」と言うのです。一番大切なものは、光、太陽光、月光、懐中電灯、電球などの「光」で、「光がなければ、私たちは見ることができない、特に、目の不自由な人は光がなければ、昼か夜かを判断することさえ困難になる」と言うのです。そして、「2 番は木や花などの植物。私たちに酸素を供給してくれます。酸素がなければ私たちは死んでしまいます」と言いました。「3 番目は私たち人間」と言っています。「もし人間が 1 人だったら、この世界で生きている意味がありません。なぜなら、もし私たちが 1 人だったら、1 人で歩いていることになり、誰にも伝えられず、何をすべきか、何を言うべきかわからなくなるからです」と話してくれました。普通にこういったことを彼らは考えているわけです。こんなことを言われたら、もう教えるべきことは何もないということではないかと、逆に、私たち街育ちの者は思います。彼ら自身はまだ子どもですが、人にとって、人間にとって一番大切なものが何なのか、生きていくことに一番大切なものが何なのか、こういったことが、もう心から分かっているのだと感じました。

ですから、私たちが行っている環境教育、アートを使った環境教育というのは、教えるものではなく、彼らに気づいてもらうための場作りをするものです。いろいろな手法で、彼ら自身が彼ら自身の叡智や価値などに気づくためにオリジナルの手法を提案しています。そして、人間と環境との関係を学ぶにあたってとても大事であるとしているのは、目に見える自然の中の物理的な「もの」だけではなく、人間以外の存在が先住民の暮らしにはあるということです。つまり、自然と言ったときに、木、花、空、空気など、空気は見えませんが、そういったもの以外に、精霊などの存在が、彼らの暮らしの中ではすごく大きいのです。環境教育を行っていくにあたっては、そういったこと

も無視できないということを感じる今日この頃です。

私の小さな活動の報告は以上です。ありがとうございました。

(終了)